

平成17年
12月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



グラフィックデザイナーにインタビュー
ゴミ箱と花嫁のへや
突然の死、当然の死遠
ご病気の方々へのメッセージ
The miracles of Jesus「イーサーの奇跡
「クリスマス」の物語、2冊

「マルヤムの子イーサーよ、あなたとあなたの母が与えられた、われの恩恵を念じなさい。われは聖霊によってあなたを強め、揺り籠の中でも、成人してからも人びとに語らせるようにした。またわれは啓典と英知と律法と福音をあなたに教えた。またあなたはわれの許しの許に、泥で鳥を形作り、われの許しの許に、これに息吹して鳥とした。あなたはまたわれの許しの許に、生まれつきの盲人と癩患者を癒した。またあなたはわれの許しの許に、死者を甦らせた。」p.22



「奇跡」というと少々大げさな響きがありますが、それに近いものやもしくは普通だったらあり得ないような出来事が起きたり、それに助けられたりする経験はありませんか？ 小さな小さな奇跡に遭遇してハッとした後、単なる偶然が重なったと思って終りにしますか？それともなぜそれが起きたのか、どこからもたらされたのか考えてみるでしょうか？

預言者イーサーは行った奇跡の数々と共に思い起こされますが、まさに誕生から最期まで奇跡に満ちた生涯を送られました。諸預言者たちはそれぞれが、遣われた時代や社会状況にふさわしい天賦の能力を授けられ、それを駆使することによって創造主の福音や警告を人々に発してきました。預言者イーサーの場合は、目に見えるものしか信じない物質中心の生活を送る人々に、奇跡という形でそれを示したのです。

預言者イーサーの時代とある意味似通った現代に住む私たちにとっても、何か「奇跡」と思えるような事柄が生じた時は、表面的な現象を評価することに終始せず、隠された印について熟考するチャンスが訪れた時なのかもしれません。

編集部より	2
聖書における預言者ムハンマド	3
祈りのある毎日へ	5
簡単に作れるブラウニ	5
崇拜、しもべであること、深い信仰	6
グラフィックデザイナーにインタビュー	9
ゴミ箱と花嫁のへや	10
遠い未来についての言及	13
突然の死、当然の死	15
ご病気の方々へのメッセージ	16
「天使にラブ・ソングを」 Sister Act	17
The miracles of Jesus 「イーサーの奇跡」	19
「クリスマス」の物語、2冊	24
アンネより	28





預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）については、それ以前に遣わされた預言者たちの多くが言及している。モーゼ五書、詩篇、福音書などでは、歪曲があるとはいえ、預言者ムハンマドの来訪への暗示を見出すことができる。

例えば、モーゼ五書は、預言者ムハンマドの出現を約束している。

「主はそのときわたしに言われた。「彼らの言うことはもつともである。わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。」（申命記18章 17～19）

「同胞の中からあなたのような預言者」という句は、明確に、イスマエールの血筋であることを意味する。イスマエールはイスハクの弟である。イスハクはムーサー（モーゼ）の民（イスラエルの子孫たち）の祖とされる。

ムーサー以後、この血筋から現れた唯一の預言者で、多くの点でムーサーに似ている（新しい法をもたらし、また敵と戦った）存在が、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）である。

またイスラエルには、ムーサーのような預言者は二度と現れなかったことも、申命記では明らかに記されている。

「イスラエルには、再びモーゼのような預言者は現れなかった。主が顔と顔を合わせて彼を選び出されたのは。」（申命記34章10）

聖クルアーンでも、同じ内容のことが記されている。

「本当にわれは、あなたがたの証人とするために、使徒をあなたがたに遣わした。われが且つて、フィルアウンに一人の使徒を送ったよう

に。」（衣を纏う者章15）

「その口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。」という文は、約束された預言者が文盲であり、命令されたことのみを語るということを示す。アッラーはこのことについて聖クルアーンでは次のように示されておられる。

「また（自分の）望むことを言っているのでもない。それはかれに啓示された、御告げに外ならない。」（星章3-4）

「主はシナイより来りセイルから人々の上に輝き昇りパランの山から顕現される。主は千よろずの聖なる者を従えて来られる。その右の手には燃える炎がある。」（申命記33-2）

この句は、預言者ムーサー、預言者イーサー、そして預言者ムハンマドを指す。ムーサーはシナイ山で神と対話し、十戒を授かった。預言者イーサーはパレスティナのセイルで神の啓示を受けた。そしてアッラーは、パラン（マッカに近い山脈）でその最後の啓示を預言者ムハンマドに下されたのだ。

旧約聖書の創世記は、パランが、預言者イブラーヒーム（彼の上に平安あれ）がハージャルと息子イスマエールを置き去りにした砂漠地帯だとしている。「彼がパランの荒れ野に住んでいたとき、」（創世記21-21）ザムザムの泉はここにあるのである。

マタイによる福音書では、私たちは興味深い預言者イーサーの言葉を見出すことができる。

イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える。だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。この石の上に落ちる者は

打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。』(マタイ 21 章 42-44)

ここでは、この「隅の親石」に従う人々の勝利が述べられていて、またこの「石」が預言者イーサーを示すものではないことも明らかである。

人々はキリスト教に抵抗したため押しつぶされてきた。キリスト教がいくつかの変化を経て、ローマの諸宗教と和解した後によりやく、ローマ帝国でキリスト教が広まりを見せた。世における西側の統治権は、中世の教会に対する科学の勝利と、無慈悲な植民地主義を通してもたらされた。

一方、イスラームは古代世界のほぼ半分を、何世紀にも渡って統治した。その本来の純粹さは失われず、敵を破り、キリスト教に対して自らを守った。事実、イスラームは人間を救済する純粹で正統な宗教、生き方、および望みとしてもう一度、立ち上がりつつある。さらには、預言者イーサー自ら、神の国が彼に従うものから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる、と述べることによって、このことを暗示しているのだ。

さらに、ブハーリーとムスリムの伝承によれば、預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は、預言者の時代という建築物を完成させる「頂石」だと表現されたことがある。

預言者(彼の上に平安あれ)に関する更なる言及が、ヨハネによる福音書に見られる。

「しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者(paraklit)はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、

世の誤りを明らかにする。」(ヨハネによる福音書 16 章 7-8)

預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は、ここではparaklitとして言及されている。Paraklitとはギリシア語で「真理と偽りを区別する者」を意味する。しかしキリスト教徒の翻訳者たちは、この言葉に他の意味合いを持たせている。助言者(国際ギデオン協会)、助け(アメリカ聖書協会)助け主(聖書会社)などである。そして、それが、聖なる靈を指す言葉だとしている。しかし、キリスト教徒にとってさえも、イーサーの到来の後で聖なる靈が降りてきたがどうかを立証するのは不可能である。もし、キリスト教徒の言うように、聖なる靈が大天使ジブリエル(ガブリエル)のことを言うなら、彼は預言者ムハンマドの元に何度も現れ、神の真理をもたらしたのである。なおその上に、イーサーはパラクリットについて、他の多くの名前を用いて、しかし同じ形で、言及している。

「弁護者(paraklit)、つまり父の元からくる真理の魂が来れば、彼は私について証言するだろう」(ヨハネによる福音書 15/26)

「私には、あなた方に話すべきことがたくさんあるが、あなた方には理解できない。しかし、その方が、真実の精神が来る時、彼はあなた方を真実に導くであろう。彼は自分から話すのではなく、ただ彼が聞いたことを話すだろう。またこれから起こることを話すだろう。その方は私に栄光をもたらす。私のものからとって、あなた方に知らせるからである。」(ヨハネによる福音書 16/12-14)

これらは、聖書における預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)に関する言及のうちの、ほんの一部に過ぎない。



アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

至高なるお方よ

約束に忠実なるお方よ

守護者よ

富む者よ

富み、満ち足りるお方よ

純正なるお方よ

主に大いなる喜びを求めるしもべ達にご満悦なさるお方よ

御名や属性を明示なさるお方よ

失態を隠されるお方よ

力強いお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。'¹



簡単に作れるブラウニ

材料：

溶かしバター 250g

ふるった小麦粉 1 1/3 カップ

砂糖 2 1/4 カップ

ココア 3/4

卵 4

ベーキングパウダー 1/4

作り方：

1. 全ての材料をボールに入れ、なめらかになるまで混ぜる。

2. 170度で30分焼く

¹ 偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



イバーダ、ウブディヤ、ウブダ(崇拝、しもべであること、深い信仰)

崇拝：

アッラーのしもべであること、信仰を同義と見る人々もいますが、多くの学者はそれぞれ異なる意味と奥深さを持っていると考えています。イバーダ(崇拝)は日常の生活の中でアッラーの命令に従い、アッラーのしもべであるための義務を果たすことを意味するのに対し、ウブダ(しもべであること)はしもべであるという意識を持って生きることと解されています。そのため、宗教的義務を遵守している人はアビドゥ(崇拝者)と呼ばれ、しもべであるという意識の中に生きている人はアブドゥ(しもべ)と呼ばれています。

崇拝としもべであることにはもう一つもっと微妙な違いがあります。崇拝行為はすべての経済的実践的義務から成り、十分な財力と身体的能力を必要とし、容易には達成されず、畏怖と希望をもって、アッラーにお喜びいただきたいという意思によるものです。(たとえば、日に5回の礼拝、断食、喜捨、マッカへの巡礼、犠牲の提供、アッラーの名前の言及や朗読などです。)しかしながら、アッラーのしもべはこれらの責任や崇拝行為を異なった方法で理解しています。それらの義務を実行するというそれぞれの行為には深い(内面的な)側面があり、それはしもべの意識と自覚のある一定のレベルが求められているのです。

宗教的義務やするべきことの最も深い面は信仰であり、それは包括的な注意と自覚を必要とします。イブン・アル＝ファリドは次のように述べています。「私の精神的な旅の中で、私が達したどんな状況や地位においても、常にしもべとしての崇拝と義務の行為は私の信仰によって果たされていた。」

崇拝を一般の人々の奉仕、しもべであることをアッラーのしもべであるために必要とされていることで、見識と自覚を持っている人々が実行すること、信仰をアッラーの近くに辿り着けた素晴らしい人々の責任であると定義する人々もいます。最初のグループはアッラーの道を進もうと努力している人々を含み、第二のグループは精神的心理的態度によって、一見克服できそうもない障害や困難を乗り越えられる人々を含みます。そして第三のグループは精神的心理的狀態ゆえにアッラーと共にいることを深く感じ、心の底からアッラーに向かうことができる人々を含みます。

また、上記の説明を2つの言葉にまとめる人々もいます。絶対なるアッラーの本質への崇拝と限定されたアッラーの特質への崇拝です。前者は創造主と被創造物、崇拝される側とする側、監視する側とされる側、維持する側とされる側の間の関係に対して常に自覚的であることと、考え感じ行動する際にこれらの関係について最も深く自覚していることを意味します。後者は日常の義務をこの自覚に相応しいように実行することを意味し、それによって自分の自覚をさらに増やすことになるのです。これらの義務を実行する人々は意思や決意、決心、誠実さによって以下のように分類することができます。

* 楽園に入ることを望む人々

- ＊ 地獄から逃れたいと望む人々
- ＊ アッラーに対する畏敬の念で愛し立つ人々
- ＊ 創造主（唯一崇拜されるに値する存在）であるアッラーと人間（自らの創造主を崇拜しなくてはいけない被創造物）の関係によって求められていることをするという人々です。

それぞれのグループにはもう一つずつ名前がついています。取引をする人、捕らわれている人、愛する人、献身的もしくは忠実な人です。ヒジュラ暦二世紀の女性ムスリム、ラビーア・アル＝アダウィヤの言葉はここに相応しいものでしょう。

「おお主よ。あなたのお近くにいられる素晴らしさに誓って、私があるを崇拝しているのは地獄を恐れるからでも樂園を望むからでもありません。私はあなたがあなたであるが故にあなたを崇拝しているのです。」

しもべであることによって人々は栄誉や威厳を得ることができます。しもべであることやアッラーへの信仰で栄誉を与えられるより高く評価され価値のあることはありません。他のもっと価値のある地位が限られた時間与えられるとしても、しもべであることは不変で継続的であるため、これが最も価値のある地位と言えるのです。そのため、アッラーは預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）に最も美しい言葉でおっしゃいました。『アッラー以外に神はなく、ムハンマドは彼のしもべであり使徒である。彼がしもべであるがゆえに、しもべであることとこれら祝福された言葉で、彼に使徒であるという栄誉を与えられた。』

また、預言者ムハンマドを昇天の夜に天国に呼ばれた時にも、アッラーは賞賛のお言葉で始められました。『そのしもべを、夜間、旅をさせた。（聖クルアーン 17：1）』それによって、しもべであることが他のものとは比べ得ないほど素晴らしいということを述べられたのです。空間も時間も超えてアッラーの慈悲と美しさの光が広がったようなこの場面において、アッラーが再び預言者ムハンマドがしもべであることを強調し『そしてしもべに、かれの啓示を告げた。（53：10）』と述べられたことはとても意味深いことでしょう。

ルーミー²は自分自身を信仰の深い人や精神的に奥行き深い人などではなく、しもべと表現していました。

「私はしもべとなり、しもべとなり、しもべとなった。

私はあなたに仕えるため、身を投げ出し伏せる。

² 1207～1273 ベルシアの神秘主義者・詩人。神学者バハー＝ウッディーン＝ワラドの子としてバルフに生まれ、1219年ごろモンゴル族の来襲を恐れて家族とともに西方に旅立ち、10年後にトルコ（ルーム）のコニヤに定住した。父亡きあとは高弟の指導で神秘主義を学び、シリアに留学してイスラーム諸学を修め、当代の大学者になった。1244年放浪の老托鉢僧シャムス＝ウッディーンとの出会いで彼の生涯は一変し、老師に神の愛を見出した彼は陶酔の神秘主義詩人に生まれ変わった。老師との別離・再会を切々たる神秘主義抒情詩に詠み、『シャムセ＝タブリーズ詩集』として名高い。不朽の名作は全6巻から成る『精神的マスナビー』で、1260年ごろから没するまでの大作であり、“ベルシア語のコラン”と評される神秘主義文学の最高傑作の地位を占める叙事詩集である。『ルーミー語録』などの散文作品もあり、踊るデルビーシュ教団の創始者でもあり、その墓はコニヤにある。

しもべたちや仕える者たちは解放されたとき喜ぶが

私はあなたのしもべになるとき喜びを感じる。」

崇拜としもべであることに関する議論の中で、次の項目はしもべが満たすべきとされるものです。

○ 自分は崇拜行為を完璧に行っていると思っていたとしても、自分の失敗について自覚し心配する。

○ 自分の崇拜が完璧であるよう努め、そしてしもべとして達成したことはすべてアッラーのお蔭であるとする。人生の一瞬一瞬すべてに永遠の主アッラーのしもべであるという意識を持つ。

○ 存在するもののすべての面をアッラーの存在という光の影だと考え、どんなこと存在や達成も自分の力によるものだと決して考えない。与えられた祝福について思い上がりせず、精神的な贈り物や輝きが抑えられていることに絶望しない。

○ アッラーとともにいるということの荣誉と価値について自覚し、決して他の種類の地位によって荣誉を得たいと思わない。

しもべであるということに並ぶほど素晴らしい地位や荣誉というものはありません。もしそのようなものがあるとするならば、それは自由でしょう。しかしそれはアッラー以外のものに心を捕われない自由やアッラー以外のものはすべてを放棄する自由という意味に限ります。アッラーへの旅の道半ばの人はそのような自由を感じることができるだけです、目的地に辿り着いた人はそれを十分に体験することができます。人が切望すべき、また自分のレベルや威厳に適した本当の自由というものはこれだと思います。

アッラーの友と呼ばれる人の一人はこの点について注目しています。

「おお息子よ。自分自身を解き放ち、自由になりなさい。

あなたはあとのどのくらい金銀に隷属し続けるつもりですか？」

ジャナイドゥ・アル＝バグダーディは警告しています。人は他のものからの隷属から解かれられない限り、本当の意味でアッラーのしもべになることはできない。アッラーの友と呼ばれる別の一人は、アッラーのしもべは、思考、想像、感情、態度において、決して何ごとをもアッラーから分けて考えるべきではないという助言をし、しもべであることと自由の意味について次のように表現しています。

「もしあなたが荣誉というドラムを叩きたいのであれば、星々の輪を越えて行きなさい。

指輪で満たされたこの円は屈辱のドラムなのだから。

おおアッラー。アッラーが愛され喜ばれるものを私たちが得られるようにしてください。」



「やすらぎ」の表紙絵をも描くグラフィックデザイナーのリュヤン・ギョレンさんのインタビュー

Q 何時頃からアートの世界へ入ろうと思っていたのですか？

A 小さい頃から絵を描く事に興味があり、中学生の頃には先生の勧めもあっていくつかのコンテストに出品し入選しました。そんな時に自分の住む町に文部省が4年生の美術高校を創ったので、その高校へ進学し、アートの基礎（水彩・油絵・版画・彫刻 e t c）を学びました。その頃は美術大学へ進学するという夢がありましたが、結局アンカラ大学の日本語日本文学学科へ進みました。

Q 何故美術大学へ行かなかったのですか？

A 大学の入試2ヶ月ほど前に、自分のこれからの人生をどのように生きて行きたいのか考え、昔から日本の文化と日本人に興味がありましたので日本語を勉強する事にしました。大学卒業後1年ほどして来日し、トルコ語を教える傍ら独学でPCを使ったグラフィックデザインを学び2001年には友人と一緒に展覧会を開催しました。

Q 影響を受けた画家や絵はあるのですか？

A Salvador Dali の絵が好きですが、特に影響を受けた画家は居ません。しいて言えば、高校の先生から影響を受けたと思います。抽象的な絵が好きですね。

Q 描くことで気をつけることとかあるのですか？

A 日々の生活でインスピレーションが浮かぶのですが、例えばリンゴを描く時そのまま描くのではなく自分がどのようにリンゴを見るか、自分の気持ちも一緒に描きます。同じ物でも文化の違い等からトルコ人の持つイメージ、日本人の持つイメージがそれぞれあるので、誰が見ても私の訴えたい事を理解してもらえる絵を描くように努力しています。それから物と物との関係を良く考えたり、本を読む事、周りにある物や事柄を良く見て想像力を広げることだと思います。本を読むと、違う人の考え方や物の見かたが良くわかります。子供の頃は物の名前は教えられたまま憶えますが、大人になるとそれらの物の関連を考えるようになります。例えば小さい魚から連想するのは、生きる力、水、太陽、他の魚、大きな魚、そのエコロジーシステムを考えるとどんどん想像力が湧いてきます。人間は善と悪の中で色々考えて生きています。あいまいなところでは自分で善か？悪か？考えます。私は事件など様々なことから受けたインスピレーションを絵にすることもあります。日本の俳句・短歌もインスピレーションで作るという点では同じだと思います。美術大学へは行きませんでした。今では私に与えられた描くという才能を使い人々にメッセージを送れるようになり、嬉しく思っています。



3 ゴミ箱と花嫁のへや

11月からのつづき...

内外の関連

人の行動や振る舞いと内的生活との間には、お互いを支えあい整えあう確かな関係が存在します。人々はいつも創造者のご満悦に正しく向かい、人間らしさや人間としての徳を正しく身につけようとします。彼らの方位自身はいつも同じ方向を指し、行動の針はいつも同じ方向を指し示します。彼らは細かい点まで気を配り、見事なほどきちんとしており、義務を果たします。内的世界に關してもとどまることなく香炉のようによい香りを放ちながら、外的世界にでも、秩序正しくきちんと生活します。靈的世界の秩序正しさと日常生活のさまざまな場所での秩序正しさの関連をよりよく示している人々はサラフィ サーリヒーンです。たとえばカリフ・ウマルの心と魂の世界でも秩序正しさは、社会生活にも反映しています。彼はあらゆる分野でまさしく秩序あるお方でした。彼がイスラームの輝ける歴史に贈った公平なシステム、軍隊の規律正しさ、近代国家の土台となる組織は彼の心に内在する秩序正しさを映し出したものです。基礎となったこれらの機構（組織体）はカリフ・ウマルの心の中にある規律を重んじる感覚が外へ現れた結果なのです。

心の秩序正しさを持たない人間はというと、いつも秩序のない、規律のない、だらしない、散らかしっぱなしの人々といえます。彼らの一人が何かをある場所に置くとそこは必ずゴミ箱と化してしまいます。彼の崇拜行為もそれを反映し、秩序正しさは見られません。彼は礼拝を強いられてしますし、断食も望まずにします。祈りやズィクルの本もいがかげんに読みます。読んだものが心に残らず、またそれを感じないことが彼を悩ませることはありません。アッラーに近づくという目的もそれを貫くために生じる困難もありません。なぜなら心に秩序正しさが無いのですから・・・

しかし、内外の関連や内が外に現れるということについて完全にそうとも言えません。時々整理整頓できるきちんとした人間になれる天分を持つ人々が、適切な環境で育てられなかったために（その天分を発達させられず、）心の中に生ずる秩序正しさを好む感覚を発見し、育てさせることができない場合があります。たとえば、サイド・ヌルスィー氏はおそらく丈夫な敷物を持っていらっしやらなかったと思いますので、粗末な薄い敷物を使っただけでいらっしやったと想像して見てください。彼はそれをきちんとして置いて置かれたことでしょう。継ぎ当てられたふとんや何度も修繕した礼拝用マットをきちんとしてたたみ部屋の隅に置きました。いつも秩序正しく身の周りを保たれていらっしやいました。働くときも服が汚れないようにと袖が落ちてこないように腕に腕

³昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがいました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がおりました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったので、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。（HPからの転載）

輪をなさいました。仕事をする時も、仕事着を着ました。服も継ぎ当てられてはいましたが、けっして汚れておらず、形も崩れていませんでした。書籍類や改訂版の本類や祈りの本も置く場所が決まっており、いつもきちんとしておりました。

食事はあなた方がおつくり下さい、食器洗いは私たちがいたします



私は小さな家で数人の友人達と共に生活していた頃のことですが、生徒達の家を時折訪ね、彼らの客となることがありました。すべての点で整っていないでも整った、一緒に私たちといった友人の中には何度も尋ねたにもかかわらず食事の作り方さえ教えることができませんでした。それどころか時々「先生、あなたがお客さんですがこれから食べる食事をあなたが作ってください。私に料理の準備ができないが後かたづけはいたしますので。」という者達もいました。彼らを責めるつもりはありません。なぜならその状態は彼らの育った環境、家庭環境、家庭教育のレベルを物語っているからです。その時まで、彼らには秩序（配列、序列）という感覚を知る機会がなかったのだと考え、できる限り整理整頓や秩序正しさに慣れさせようと努めました。整理整頓と秩序正しさに慣れていない生徒達が住んでいた家々はひどい状態でした。崇拜行為をする人々にふさわしい静けさに程遠い雰囲気でした。そこでは本はよく読まれて、知識を得るのには開かれた状態でした。全ての点で整っていないでも整っていた部分がありました。それに免じて不足な部分は補われますから。

しかし、なんとも素晴らしい家々もありました。全てが「花嫁の部屋」のようでした。それらの家のあらゆる空間で、アッラーを想い、祈りを捧げる声は美しく響き渡りました。信仰深さと甘美さを感じました。その家々には、聖なる静けさが隅々を覆いました。そして新たな日を迎えました。信仰心とクルアーンに従って行動しようとする幸運な人々は、彼らの心の中の清浄さや秩序正しさが映し出され、家々の隅々まで行き渡ります。客人たちになされるもてなしと共に彼らの眼にも心地よさを与えました。

整理整頓と秩序正しさは特に人々の集うところではしもべの権利という点からも重要です。不注意に生活している人々は他の人々の居心地を悪くします。乱雑さは繊細な心の持ち主に安らぎを与えぬ原因となります。ある時、アッラーの使徒（彼の上に平安あれ）が手にスコップを持っている人々に対して、「ここを二回ほればよろしいのでは、」とおっしゃいました。その方が「このようでは何か不都合がありますか？」と応えると、預言者（彼の上に平安あれ）は、「目に不快を感じます。」と仰られました。このように、目の暗い人々がいます。目がないのかそれとも不快を感じることがないのかわかりませんが、彼らは乱雑さにより不快にならないようです。しかし、この乱雑な状態が他の人々を不快にし、そのことから圧迫されるような、その原因をつくった人はしもべの権利を侵したことになるのです。時折「他の人がきれいにすればいいのに、他の人が片付ければいいのに。」という感じ方や考え方から、その結果、活動的でなくなり仕事の手伝いをするのが億劫になり、さらには、他の人たちを、（失礼とは存じますが）無知で愚か者とみなしますが、これは大変失敬なことです。と同時に、しもべの権利も侵していることになります。

秩序正しさと目の快さ

真の主は篤信のしもべたちに天国を約束なさったとき「そこにはあなたの方のために豊富な果実があり、それにあなた方は満足する。(43・73)」と仰いました。ここでは、目の欲望を満たし目から心の中へ喜びが流れ込む光景を説明しています。つまり、恵みとして目から心の中へ流れ心に染み込むこの光景が人の欲望を満たすわけで、これは大変重要な点ですが、同時に異なった形の恵みを表しています。そうです、おいしい食べ物、心地よい香り、耳にやさしい声がそれぞれ恵みであるように、美しい光景もまた恵みのひとつです。このように、舌、鼻、耳が喜びを感じるように、目も喜ぶものです。目の喜びを味わうための重要な要素として、整理整頓秩序正しさがあるわけです。

要するに、サイド・ヌルスィー氏が示されたように、継続的に働き続ける工場のようにも、いつも客人でいっぱいになっては去っていく宿屋のようなこの宇宙は、ゴミやくずですばやく汚れ、その中に住めない状態となるはずですが、実際は大変美しくきれいです。そこには unnecessary なものは一切見当たりません。神聖なる御方(クッドウー

ス)という御名の栄誉によって、この宇宙をまるで小さな部屋のようにきれいにし、順序良く美しく配列する御方であられる真の主は、自然という本のすべてのページを、眺めるのに飽くことをしらないほどの美しさで飾り給い、地上のあらゆる場所を美しい絵画のように私たちに目の前に並べ給いました。この光景を見た者達、とくに宇宙という本を読み学び、神の御名の秘密を理解しようと望む信仰者達は、心の秩序正しさと共に、整然さと秩序正しさを発見するに違いありません。そして、一人一人が秩序ある人間として生きていくことでしょう。





遠い未来についての言及

2. 共産主義のもたらす災い

イブン・ウマルは語っている。「預言者はある日、東の方を向かれて『注意なさい、シャイターンは、この方角の、シャイターンの時代が広まったところから出現するであろう』と言われた」⁴

非常に大きな可能性として、預言者はこのハディースで、今日のヨーロッパの残酷さと不信心に匹敵するものとして、東側から出現するであろうある暴挙を示されていたと思われる。

ここで見られる「カルン」と言うアラビア語は「つの」という意味をも持つが時代や世紀というような意味もある。ここではそちらのほうと解釈するほうが妥当であろう。シャイターン（悪魔）の時代、つまり預言者の時代と逆の意味を持つものである。神の否定と言う基本の上に成り立つ無神論は、シャイターンが人間の欲望を通して吹き込んで来た全ての悪が、具現化したものである。資本主義の落とし子でもあるこの恐ろしい仕組みは、今日もはや破滅を迎えようとしているのにも関わらず、いまだに宗教や宗教に関りのあるさまざまなこと、歴史、さらには民主主義をさえ、競争相手としてさえ認めないほどの首位の座を守り続けており、恐ろしい悪夢であり続けているのである。だからこそ、預言者ムハンマドは、特にこの仕組みの支配する時代をシャイターンの時代と呼ばれたのだと私は思う。そして、その時代に全世界を襲う災いについて、警告されているのだ。

3. ユーフラテス川の窟

さらに預言者ムハンマドは言われている。「おそらく、ユーフラテス川の水は干上がり、金でできた山が出現するであろう。そこに誰がいたとしても、何も取ってはならない」⁵

今日まで、このユーフラテス川の付近でいくつもの殺戮が行なわれてきた。新しいものから始めるなら、イラン・イラク戦争があり、また1958年にもこの地で非常に大規模な殺戮が行なわれ、預言者ムハンマドの子孫たちが犠牲となった。ただ、彼らもオスマントルコ帝国を侵略したのであった。（皆自分がやったことと同じ形で報いを受けるのである）

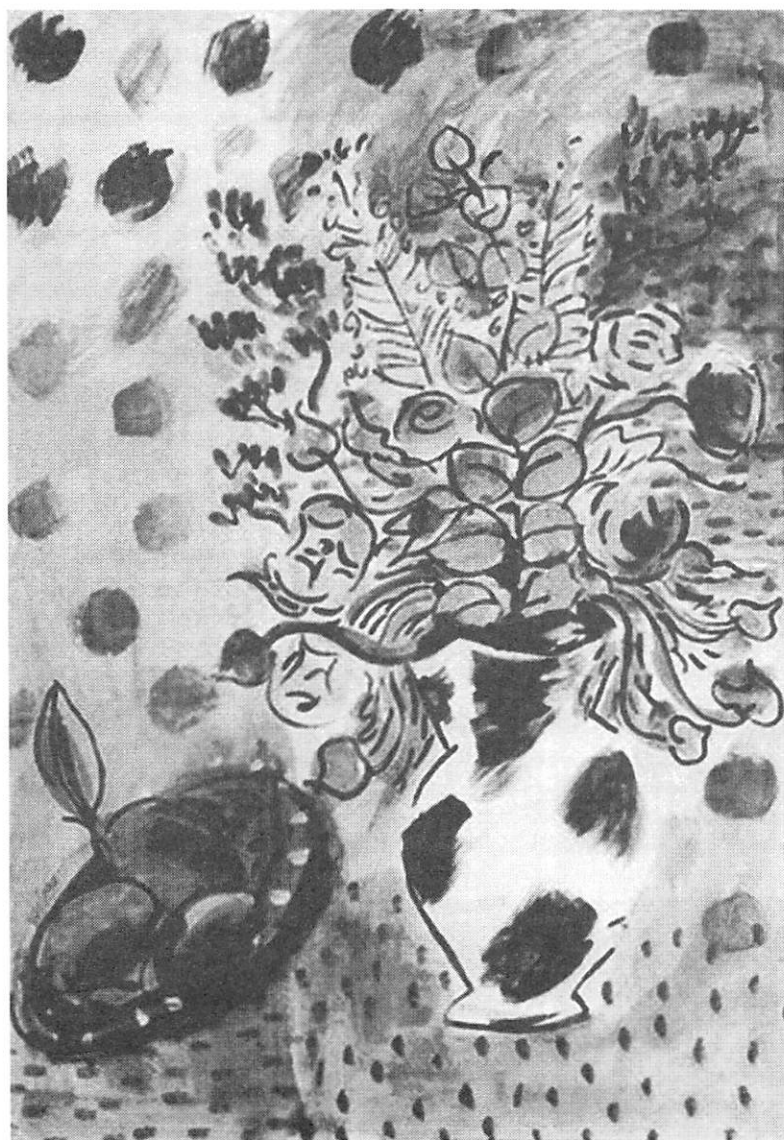
ただ、こういった出来事をこのハディースと結びつけるのは適当ではないだろう。おそらくは、今後起こ

⁴ Bukhari, Fitan 16; Muslim, Fitan 45; Ibn Hanbal, Musnad 2/50, 72

⁵ Bukhari, Fitan 24; Muslim, Fitan 30; Abu Dawud, Malahim 12, 13

ることについての言及と見るべきである。例えば、ユーフラテス川の水が金と同様の価値を持つ時代についての言及かもしれない。あるいは、そこにダムができ、そこからの利益が金の価値を持つのもかもしれない。さらには、ユーフラテス川の水が完全に干上がった後、金や石油が出るのかもしれない。ただ、何であれ、この地区は今日、イスラーム世界にとってダイナマイトのような、危険を内包したものであることに疑いの余地はない。

これらは今までまだ実現しなかった、そして今後実現するであろう出来事である。そしてその時代に生きる者たちは、預言者ムハンマドに再度、心から「あなたの言うことは正しい」と言うであろう。そしてその信仰を厚くするであろう。





去年の冬、突然友人からメールが届きました。そのメールの内容は、私の海外に住む友人の婚約者が心臓発作で亡くなったというものでした。その友人を私は姉のようにしています。私が最初に彼女に知り合った時にはすでに結婚を前提に長い間付き合っていた二人でしたが、その後も具体的な結婚話が出ておらず、結局私のほうが先に結婚しました。そして去年、具体的に彼女達が晴れて結婚するという話になり、日本にいる同じく彼女を慕う共通の友人達とも相談し、結婚式へどのように参加できるかなどを相談していました。一方、結婚を控えた彼女は、日本から結婚式へ参加を考えていた私達にホテルの手配などの具体的な計画を毎回メールで送ってきていました。

そんな時、突然私の携帯に朝早くからメールが届き、彼女の婚約者が亡くなったことを知りました。まったく信じられない瞬間でした。彼女から直接連絡を受けた友人もまた、彼女がよく冗談をするので、最初は本当に冗談だと思ったとっていました。それは朝早くに心臓発作で突然亡くなったという知らせでした。彼は一人暮らしだったので、朝早いということもあって、誰も彼のそばにはいませんでした。彼はいつも仕事に追われている忙しい人で、そして仕事が終わるとお酒を飲んでどっぷりと酔い、ストレスを紛らわせていたと彼の婚約者であった私の友人が話したことがありました。彼女よりも彼の方が年上で、体の大きい彼と小柄な彼女を比べると彼女が子供のようにも見えました。そして私達はそんな様子を親子みたいだと冗談をいいながら、いつも微笑ましくみていました。でも彼の死を一番受け入れられなかったのが、結婚を目の前にしていた彼女でしょう。その連絡を受けてから、彼の死を思う一方、彼女のことが心配になりました。思いもよらなかった結果に彼女の精神的状態を心配し、間違いは起こさないだろうかと本当に心配しました。彼女に電話をした時にはもちろん気を落としていましたが、しっかりとした受け答えに安心しました。

その後私達に会いに彼女が日本へ来ました。彼女の精神状態は想像していたよりも安定していて、そんな様子に私達が安心させられました。今、私と彼女は以前と変わらず冗談を言い合い、メールを交換しながらお互いに今後会える日を楽しみに待っています。「死」は突然やってきました。前触れもなく、それも人生で最大の喜びの一つである結婚という日に向かってる時にやってきました。その突然の「死」の為に心の準備をすることができませんでした。なぜならそれは突然やってきたからです。でもこれは当然の可能性のもとでの出来事です。「死」はいつ訪れるのか誰も予想できません。でも人間ひとりひとりすべてにやってくる出来事です。予想ができないために、いつもその準備をすることが必要なのです。

ご病気の方々へのメッセージ

第11の治療薬

忍耐力を失っている思い人よ。病はあなたに苦痛を与える。しかしそれと同時にそれが治ったあとは、病が消え去ったことによる精神的喜び、善行を行いえた事による魂の喜びをあなたに与えてきた。今日この時間より先のことについては、まだ病気は存在していない。存在していないのだから苦痛もないはずである。苦痛がないのだから悲嘆にくれる必要もないのだ。存在しないものを存在するかのよう感じることによってあなたに忍耐力は失われるのである。

なぜなら、今日より以前の全ての病は、時が過ぎ去ったのと同時にその苦痛も去ってしまったはずであり、その病のお陰である善行と、病が去ったことによる喜びだけがそこに残ったのである。あなたに喜びを与えるはずのものであるのに、これらを考え、思い煩うこと、耐えられないと感じることは馬鹿げた行為である。これからやってくる日々とは、まだやってきてはいない日々ということである。それらのことを今から考えて、まだ存在しない日に起こるまだ存在しない病気からの、まだ存在しない苦しみについて考え思い煩うこと、耐えられないと感じること、この三段階のまだ存在しないものに対して抗おうとすることが馬鹿げた行為でなくて何であろうか。

今現在より前の病はあなたに喜びを与えているものである。未来はまだ存在せず、未来における病も、その苦しみもまだ存在しないものである。神があなたに与えられた忍耐力をあちこちに分散させてはいけない。今現在の苦しみに対してのみ集中し、耐えるようにしなさい。

第12の治療薬

病のせいで崇拝行為や祈りの言葉から遠ざかってしまい、その欠乏によって苦しんでいる思い人よ。あなたに教えよう。ハディースに、次のようなものがある。「アッラーが好まれないものから身を守ろうと努める信者は、病気のせいで唱えることができなかつた祈りの章句による善行を、その病気である時期に獲得する」。義務の礼拝をできる限り守っている病人は、忍耐と神への信用によって、そして義務を果たしていることによって、その期間のスナ（随意）の礼拝をも、行ったことになる。

病は、人の弱さ、無力さをほのめかしているものである。弱さという言語で、無力さという言葉で、人はお祈りを行っていることになる。アッラーは人にこの上ない弱さ、際限のない無力さを与えられた。常にこういった形で神の扉に庇護を求め、祈るように、ドゥアーするように、と。

「あなた方が私の主に祈らないなら、かれはあなた方を構ってくださらないであろう」（識別章77節）というクルアーンの言葉に秘められた意味のように、心からのドゥアーや祈りは人が創造された理由であり、その価値の根拠でもある。病はドゥアーや祈りのきっかけとなるものである。だから人は、不平をいうのではなくではなく感謝をするべきであり、病によって開かれたドゥアーの栓を、健康を取り戻すことによって閉じてしまうことのないようにしなければならないのだ。

「天使にラブ・ソングを」 Sister Act

11月も半ばに差し掛かると、日本の都市は何故かクリスマス一色になりますね。皆様がこの雑誌を手にとられる頃には、もう盛り上がり最高潮に達しているところかと思えます。これが日本ではなんとなく風物詩になっている気もして、元々宗教的意味合いのある日であっても商売とがっちり結びついてしまう商業主義にうんざりするとともに、街のライトアップやイルミネーション、人々のなんとなくうきうきした気分を楽しみにしてしまう私もあります。日本の「クリスマス」は欧米のクリスマスの意味合いとはまったく異なり、単なるイベントになってしまっていますから、特に意味はないように思います。ですが、なんとなくこの時期にはキリスト教に関係したりクリスマスに関係したりする映画が見たくなるようにも思います。そういう映画の代表格、と私が勝手に考えているのはビング・クロスビーの『ホワイト・クリスマス』だったり、ジェイムス・ステュワートの『素晴らしき哉、人生！』だったりします。どちらも心暖まるいい映画ですし、古いのですが大変面白い作品です。神に関するものでは、M.N.シャマラン監督の『翼のない天使』『サイン』などもこの誌上でご紹介したとおり、意味深いものでした。イエス（イーサー）そのものに関わるものでは、『パッション』もここでご紹介したことがあります（私の解釈が多少問題だったようですが）。さて、色々あるクリスマス関係（と勝手に名づけてしまいますが）の映画ですが、今回は前述の映画達とは毛色がかなり違う、ウーピー・ゴールドバーク主演の『天使にラブ・ソングを』ご紹介しようと思います。

この映画は私が気に入っているものというより、私の友人が大好きな映画です。彼女はとあるキリスト教系新興宗教団体に子供のころから入っていました。彼女は大きくなるにしたがって、神への愛情や信頼といった「中身」よりも組織をしっかり守っていくことや聖書の一字一句を真実ととることに力を注いでいくシステムを持ったその団体の方針に疑問を持つようになりました。「本当は神の存在とか、楽園だとかを信じていない人が多いように思う。周りの人がみんな同じだから、そうやっていかないと生きていけないからとりあえず信じていたり、自分の生活や世界を維持していくためにとりあえず教会の仕事をしたりしている。本当に世界の終わりが来ると思って布教したりしていない。時間数をこなせばいいと思ってる。それは、その人に本当に信仰があるとは言えないし、そんなものを守っていく所に意味があるんだろうかと思った。」でも、家族はそこにいて、自分だけそこを抜けるわけにもいかない。そんな時に見たのがこの映画だったそうです。

アメリカのカジノのクラブ・シンガー、デロリスはマフィアのドンの愛人だった。そのドンが組織の裏切り者を殺す現場を目撃してしまう。恐ろしくなったデロリスは警察へ駆け込む。その結果、とりあえずデロリスはサンフランシスコの修道院に新米修道女としてかくまわれることになった。厳格な修道院長に対しても全くめげずに自分の道を進む彼女は若い修道女たちと親しくなり、聖歌隊のリーダーを引き継ぐことになる。歌は彼女の得意分野。そこでソウルやロックを加え、聖歌隊の歌を誰もが楽しめるエンターテイメントにしてしまった。彼女らの噂は全世界に広まり、やがてローマ法王までもがやってくることになった。しかしその頃マフィアのドンも、目撃者であるデロリスを追い詰めてきていた…。

話は難しくなく、歌や踊りがたくさんあって、見ていて楽しい気持ちになる映画です。この映画を

見ていると、積極的に考えて、どんどん行動に移していくデロリス、何があっても自分に自信を持ち、なんでも「楽しくなくっちゃ！」とやっつけていける彼女のパワーに元気をもらうようです。更に、修道院やそこでの信仰生活になんだかんだと文句をいいながらも、神様はどういうものなのか一番良くわかっているのがデロリスじゃないか、そんな気がします。それは、聖歌によって歌われている事、神への賛美だとか、信仰に関してだとかいうことを、みんなに楽しいと思える形、みんなが自発的に聞こう、歌おう、体験しようとする形で広めて行ったことにも現れているのではないのでしょうか。それは彼女がたまたまクラブ・シンガーという設定だったからだろうし、そんな陽気に歌い騒いでいいの、ただのエンターテイメントだろう、という意見もあるとは思いますが、信仰のエッセンスをとりだして、わかりやすく、親しみやすく広めることが出来ている。これは、何者にも代えがたい効果ではないのでしょうか。

冒頭でお話した私の友人は、この映画を見てつくづく自分のいる団体はだめだ、と感じたそうです。自分たちに「この世は仮の世界だから」と我慢することやさまざまな行いのカタチを強いるばかりで、本当に大事な部分、つまり精神的な神とのつながりだとか、少し教義から外れてしまってもその心を見て判断しようという「自分で考えるチカラ」のようなものが欠けているんじゃないか。そう考えた彼女は、悩みぬいた挙句、20年以上続けてきたその宗教団体を辞めました。先日、この映画の続編『天使にラブ・ソングを2』（監督は別の人ですが）と一緒に見た時に「これは私に色々な事を気づかせてくれた映画だった。歌も素晴らしいし、娯楽映画ということを超えて感動するの。人生に何が重要なのかということをよくわかっている話だよ」としみじみ言っていました。

もちろん映画ですから、本当の修道院の方やキリスト教徒の方々から見れば、「我々を馬鹿にしてるんじゃないか」と思うところもあるかもしれません。ですが、たとえ事実と異なる部分があったとしても、様々な事を考えさせてくれ、かつ幸せな気分にしてくれる映画であることは間違いないと思います。今、色々な場所で必要とされているのはデロリスのような（品はないしどこにいても開けっぴろげな性格だけれども）、明るく情熱があって、信念がはっきりしている人なのではないのでしょうか。

信念や人生、色々考えてしまうようなムズカシイことはさて置き、見るととにかく「自分にもなにか出来るかも！やれることからやってみよう！」とも思ってしまうこの映画、来年の計を色々考えるこの時期にみるにはピッタリなのかもしれません。

『天使にラブ・ソングを』 1992年 アメリカ

監督：エミール・アルドリーノ

出演：ウーピー・ゴールドバーグ（デロリス）／マギー・スミス（修道院長）／ハーヴェイ・カルテル（マフィアのドン）ほか





The miracles of Jesus 「イエサーの奇跡」

「奇跡」とは、普通では起こりえないような特殊な出来事を意味する。奇跡は、神がご自身の代理として真実を伝えるために遣わされた預言者を通して、神によって実現される。

預言者は、人間としてはかなさを持ち、神は力の主であられる。一つの奇跡は、神がご自身の使いとして使わされた使者は、彼自身が単独で行動しているのではなく、その創造主が彼と共にあられるのだ、ということを示すものである。

このことから、奇跡は、ほとんど全ての預言者たちに共通する特徴である。奇跡によって意図されるところは、人々が信じることを容易にし、それによって永遠の救いを得ることなのだ。

預言者たちに共通の特質：人々を闇から救い、光へと導くという聖なる義務によって遣わされた、選ばれた人々は、奇跡のような現象によってサポートされ、その奇跡が示された人々へのメッセージを携えている。多くの人々が、真実の輝かしい雰囲気へと導かれてきたが、しかしそれ以外の多くの人々が、永遠の喪失のうちに死を迎えた。これらの貴重な祝福を拒んだ故である。

人の知性や意志に向け、聖クルアーンはしばしば、預言者によって実現された多くの奇跡について言及している。これらは、一回の記事で書ききれものではないが、これらの奇跡についての一つの考えを明らかにするため、ここではそれらのうちのいくつかに触れてみたい。それから、イエサーの奇跡という本題に入ろうと思う。

一般的に、奇跡は、それが行なわれた時点で発生し、そして終わる。しかし、最後の預言者に与えられたいくつかの奇跡（聖クルアーンなど）は、奇跡であり続けている。それが下された時の状況においては、言語表現は特別な重要性を持ち、発達していた。その面で、クルアーンは、何物にも比されることがないであろう方法で送られた、一つの奇跡なのだ。

それぞれの預言者が、彼が遣わされた地の人々にふさわしいあり方で、奇跡を与えられていた。ムーサーの時代には、魔術が非常に重要視されていた。イエサーの時代には医術が普及してきていたため、彼の奇跡は通常、医学的な知識に関連付けられるものである。預言者たちは、彼らが遣わされた人々に対し、一つの重要な優位性を確立し、人々が理解できる言葉を話すことによって人々の注意を自らにひきつけることを可能とし、自らの声をより容易に届けられるものとしたのである。

これらの奇跡を、科学やテクノロジーの観点から見ると、シュレイーマーンが風に乗れ、一ヶ月かかる距離を朝から夜までの間に移動したことは、風を利用することで長い距離が移動できることを示すものとなる。これは私たちに、人が風の恵みを利用できるようになることを示していたと見ることができる。さらには、人が、飛行機やロケット、その他の移動手段によってこれを実現できるであろうというこ

とを想起させるものであったということもできよう。

同時に、ムーサーが彼の杖で地を打つことによって水をもたらしたことは、人々が多くの宝、神が地面の下に隠された多くの貴重なものを得るであろうということを示している。これら奇跡の背後に隠された真のメッセージは、人に、預言者たちの実践例から学び、また受け継いだ文化や知識を生かし、自らの知恵を用いることによって結果を生み出すことを奨励しているのである。

神からの啓示は、一つのターゲットのみを目的とするものではない。言葉でさえも、複数の意味で用いられている。従って、これらの出来事は多くの側面を持つ。他の人々がそれらに気づくことが必要となる。今を生きる人々が、奇跡の言葉を理解し、そのメッセージを科学や技術のためにどう生かすかを知ることが、必要な到達目標点となるのだ。

今日、人々の前にあるゴールは、これらの奇跡が現在意味しているものは何かを理解し、この情報を進歩や発展の為に生かすことである。

イーサーの奇跡：イーサー（彼の上にアッラーのご満悦がありますように）は、一人の預言者であり、またクルアーンの教えるところによれば、アッラーの前で特別な位置を占めている。彼は、最も偉大な五人の預言者の一人である。彼が生きた時代の地理的、民族的、社会的、政治的構造から見ると、彼が、物質に重きを置く人々と直面したということが明らかになる。彼らは目に見える以外の何物も信じず、非常に頑固で、部族の考えに固執する人々だった。こういった状況は、彼の偉大さを示すものである。人々は自然に、奇跡を待ち望む。実際、クルアーンは彼らの熱望と、彼らがイーサーへ奇跡を示すよう迫ったことを明らかにしている。彼の奇跡は、死者の復活、

目の見えない人やハンセン病患者の治療、泥から作った鳥へ命を吹き込むこと、人々の家で起こっている出来事を知らせること、空中から宴のテーブルを下ろすこと、などと説明することができる。

実際、イーサーの一生は、最初から最後までが一つの奇跡であった。彼は父を持たず、ゆりかごにいる頃に話をした。そして人々の目の前で、天国に昇った。彼が預言者になるという知らせは、彼が生まれる前にもたらされていた。彼の名前はアッラーによって与えられたが、それもその出生以前のことであった。しかし、これらは彼が使者としての任務につくよりも前に起こったことであり、そのため一般的な意味での奇跡の範疇には含まれないとされている。むしろこれらは、イーサーの、アッラーの御前における位置とその重要性を示すサインだと見なされている。



彼の誕生とそれ以前の出来事は、人類の誕生を表現するようなものであった。アーダムは父母なしで創造されたが、イーサーは父親なしで創造された。クルアーンでは、この創造に注意を促している。「イーサーはアッラーの御許では、丁度アーダムと同じである。かれが泥でかれ（アーダム）を創られ、それに「有れ。」と仰せになるとかれは（人間として）存在した。

真理はあなたの主から（来る）。だから懐疑の徒の仲間となつてはならない。」（イムラーン家章第59-60）この章句は、アッラーの力がそこにあるのであれば、それ以外のあらゆる物事は何もなしえないことを説いている。

彼が生まれてすぐ、人々がマルヤムを非難し始めた時、イーサーは話をし、純潔なる母マルヤムを守った。彼がまだゆりかごにいる時から、預言者としての任務が、主によって与えられたことがわかる。彼の誕生という吉報を伝える章句では、次のように示されている。「かれは揺り籠の中でも、また成人してからも人びとに語り、正しい者の一人である。」（イムラーン家章46）彼の話したことは次のようであった。

「（その時）かれ（息子）は言った。『わたしは、本当にアッラーのしもべです。かれは啓典をわたしに与え、またわたしを預言者になされました。またかれは、わたしが何処にしようとも祝福を与えます。また生命のある限り礼拝を捧げ、喜捨をするよう、わたしに御命じになりました。またわたしの母に孝養を尽くさせ、高慢な恵まれない者になされませんでした。またわたしの出生の日、死去の日、復活の日、わたしの上に平安がありますように。』」（マルヤム章30-33）

クルアーンは述べる。

「そのこと（イーサーがマルヤムの子であること）に就いて、かれら（ユダヤ教徒、キリスト教徒）は疑っているが本当に真実そのものである。」（マルヤム章第34）

これによってクルアーンは、イーサーに関する論争に最終判断を下しているのだ。

もちろん、イーサーの奇跡はその誕生に限られたことではない。その人生を大きな奇跡と共にスタートさせたイーサーは、その預言者としての任務をサポートする、多くの奇跡を示し続けた。いくつかの奇跡について、クルアーンで言及されている。「主は啓典と英知と律法と福音とをかれに教えられ、そしてかれを、イスラエルの子孫への使徒とされた。（イーサーは言った。）「わたしは、あなたがたの主から、印を齎したのである。わたしはあなたがたのために、泥で鳥の形を造り、それに息を吹き込めば、アッラーの御許しによりそれは鳥になる。またアッラーの御許しによって、生れ付きの盲人や、癩患者を治し、また死者を生き返らせる。またわたしは、あなたがたが何を食べ、何を家に蓄えているかを告げよう。もしあなたがたが（真の）信者なら、その中にあなたがたへの印がある。わたしはまた、わたしより以前に下された律法を実証し、またあなたがたに禁じられていたことの一部を解禁するために、あなたがたの主からの印を齎したのである。だからアッラーを畏れ、わたしに従いなさい。本当にわたしの主はアッラーであり、またあなたがたの主であられる。だからかれに仕えなさい。これこそは、正しい道である。」（マル

よく知られているように、この言葉は天使が語ったものであり、その出来事が起こる以前に語られたものでもある。イーサーの立場について述べる時、彼らは、奇跡が起こることに触れ、また彼と彼の民の間の対話について示唆している。

他の章句でも、同じ項目を強調すると共に、最初の日以来イーサーに何が起こったかを明らかにしている。

「アッラーがこう仰せられた時を思い起せ。「マルヤムの子イーサーよ、あなたとあなたの母が与えられた、われの恩恵を念じなさい。われは聖霊によってあなたを強め、揺り籠の中でも、成人してからも人びとに語らせるようにした。またわれは啓典と英知と律法と福音をあなたに教えた。またあなたはわれの許しの許に、泥で鳥を形作り、われの許しの許に、これに息吹して鳥とした。あなたはまたわれの許しの許に、生まれつきの盲人と癩患者を癒した。またあなたはわれの許しの許に、死者を甦らせた。またわれはあなたが明証をもってイスラエルの子孫の許に赴いた時、かれらの手を押えて守ってやった。かれらの中の不信心な者は、『これは明らかに魔術に過ぎない。』と言った。その時われは弟子たちに啓示して、『われを信じ、わが使徒を信じなさい。』と言った。かれらは(答えて)言った。『わたしたちは信じます。あなたは、わたしたちがムスリムであることを立証して下さい。』」(食卓章110-111)

イーサーの更なる奇跡が、人々が食べ物を求めていた際に、天から食卓を下ろした出来事である。クルアーンでは以下のように説かれている。

「かれら弟子たちが、こう言った時を思い起せ。「マルヤムの子イーサーよ、あなたの主は、わたしたちのために、(食べ物を)並べた食卓を、天から御下しになるであろうか。」かれ(イーサー)は言った。「あなたがたが信者なら、アッラーを畏れなさい。」かれらは言った。「わたしたちはその(食卓)で食べて、心を安らげたい。またあなたのわたしたちに語られたことが真実であることを知り、わたしたちが、その証人になることを乞い願います。」(食卓章112-115)

一般的に、全ての預言者たちに対し、反抗的な態度をとる人々が存在した。また、新しいことを受け入れられない人々がいた。そのような、闇の小道の旅人たちは、彼らが眼にした通常ではありえない出来事を『魔術』と決め付けた。彼らはイーサーや、いろいろだ出来事を、それまでの預言者たちに対する見方と何も変わらないと見なした。イーサーの、この件に関する反応も、それまでの預言者たちと同様のものではなかった。自らの任務を誤りなく果たした上でイーサーは、それ以前の預言者たちと同じように、次のように言った。「本当にアッラーは、わたしの主であり、またあなたがたの主であられる。だからかれに仕えなさい。これこそ正しい道である。」(マルヤム章36)この言葉によって、彼は、人々を自分の意志と向きあわせたのである。これによって、望む者は従い、正しい道を見出し、救いを得ることになり、暗闇を選んだ人たちは、自らの我欲のいけにえとなることになったのである。

イーサーの別離：誕生と同様、イーサーの別離もまた、それ自体が一つの奇跡であった。アッラー

はイーサーを、彼を殺そうと望む者たちの手には残されず、クルアーンの言葉によるなら、彼を天に召されたのだ。

「わたしたちはアッラーの使徒、マルヤムの子マスィーフ（メシア）、イーサーを殺したぞ」という言葉のために（心を封じられた）。だがかれらがかれ（イーサー）を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない。只かれらにそう見えたまでである。本当にこのことに就いて議論する者は、それに疑問を抱いている。かれらはそれに就いて（確かな）知識はなく、只臆測するだけである。確実にかれを殺したというわけではなく。いや、アッラーはかれを、御側に召されたのである。アッラーは偉力ならびなく英明であられる。」（婦人章157-158）

別の章でも、詳しい言及がある。「アッラーがこう仰せられた時を思い起せ。「イーサーよ、われはあなたを召し、われのもとにあげて、不信心者（の虚偽）から清めるであろう。またわれは、あなたに追従する者を、審判の日まで、不信心の者たちの上位におくであろう。それからあなたがたは（皆）われの許に帰り、あなたがたが争っていたことに就いて、われは裁決を下すであろう。その時われは、現世においても来世でも不信心な者たちに厳しい懲罰を与えよう。（誰一人）かれらを助ける者もない。」（イムラーン家章55-56）

このように、イーサーの奇跡に満ちた生は、更なる奇跡によってその次元を変え、また不死身という誉れが与えられた。さらには、審判の日が近づくと、もう一度人々に真実を伝えるために彼は戻ってくるだろう、という複数の言及がなされている。このことは、彼の奇跡が、未来にわたって続いていくことを明らかに証言しているのだ。

預言者ムハンマドのいくつかのハディースで、「終末の時が近づくと、イーサーが再度現れ、無神論を打破する」という意味のことが言及されているのである。

イーサーの再訪は、アッラーのお力を考えるならば、当然実現の範疇にある。しかし、これらの言及は比喩的なものである可能性があることも考えるべきである。ここで暗示されている可能性があるのは、無神論が衰退し、真実が勝利することでありうる。ここにおいてイーサーの道と真実の精神の道は一体化し、人々は再び、善と、美と、平和と、満足を見出し、真実に満たされた生を生きるであろう。

全ての預言者たちは、同じ母を持つ子供たちのようである。彼らの主は同一であり、彼らの目的も同一である。現在を生きる人々は、これまでも増して、彼らのメッセージを必要としている。真実を到達目標としていた人々によって与えられたメッセージを。





姉や私が幼かった頃、両親はよく寝る前に本を読んでもくれました。たいていは福音館書店の子ども月刊絵本で、毎回5、6冊は読んでもらいました。そのせいか姉も私も、早くから自分で本を読むようになり、本が好きになりました。

あるクリスマスの日の思い出です。私は「サンタさん」に、ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』をお願いしていました。私のお願いの内容は、家族みんなが知っていました。クリスマスの朝、目覚めると、枕元にはなぜか二つプレゼントが置いてありました。一つは簡素に包まれた図書券でした。もう一つはプレゼント包装された『はてしない物語』の本でした。それを姉に知らせると、これまたなぜかとても驚いていました。当時中学生だった姉の話はこうでした。

一夜遅くまで起きていて、寝ようとした時、ともえの枕元を見たら、プレゼントが無かった。お父さんもお母さんも寝ていた。これは、お願いが届かなかったか、それとも無理だったかということで、このままではまずいと思い、急いで手持ちの図書券を包んでプレゼントにした。ともえがあの本をあんなにほしがっていたから—

当時小学校中学年だった私は、正直にお話しますと、最初はこの話をいぶかしいと思いました。でも、同時に、その何倍も何倍も、嬉しいと思いました。図書券は、確か、『はてしない物語』の代金には届いていませんでした。それでも、姉の気持ちが嬉しかったのです。図書券は、本好きの私よりも、さらに本の好きな、「本の虫」の姉の大切な宝であったはずでした。今でも、クリスマスの時期になると、教会のことやケーキのことと合わせて、このプレゼントのことを思い出します。

というわけで、今回は、「クリスマス」の物語を2冊、ご紹介します。

まずは『飛ぶ教室』。このお話は、この長さの本との出会いにしてはめずらしく、最初、母に読み聞かせをしてもらいました。よほど母が気に入っていたのかも知れません。一日一章のペースだったと思うのですが、「前書き」が二つもあって、それも普通の章と同じくらいの長さでしたので、二日間「前書き」をきくことになり、子どもながらに驚いたのを憶えています。それでもこの「前書き」は気に入って、作者と同じ「みどり色のえんぴつ」で「おはなし」を書こうなどと試みたこともありました。

「こんどこそ、ちゃんとしたクリスマスの物語を書きます。」と、前書きは始まります。最初にこれが無かったら、はじめのほうは、学校を舞台にした、冬のお話かなあ、くらいに思うかもしれません。ドイツのある寄宿学校で繰り広げられる、いろいろな事件や、勇気について、大人に近づいている子どもの友情について、子どもの心を忘れない大人の友情について、先生と生徒の信頼についてなどが書いてあるからです。それまでの話もとてもおもしろいのですが、最後はクリスマスにまつわる話に物語が集約されていきます。

主人公のマルチン＝ターラーという少年が、彼の家庭にお金が無くて、クリスマスなのに学校から我が家へ帰れないこととなります。それまで物語の主軸で、その賢さと勇気でリーダーシップぶりを発揮していた彼が一転、ショックのあまり何に対しても身が入らなくなってしまいます。周りはずいぶんクリスマスモード、帰省モードになっていくなか、彼は一人、誰にも相談もせず、苦しみます。

<逃げるんだ、とにかく逃げるんだ、このクリスマスの空気の中から。>

彼は、北通りの角で、やっと立ち止まると、パン屋のシェルフの店のショーウィンドーを下見しました。

ここで彼はあしたの午後、ココアを飲んで、ケーキを食べる予定だったからです。おそらくやりきれない気持ちでしょう。でも、それがお母さんの希望でした。それに彼は、それをかたく約束していました。(p 222)

彼の両親も同じでした。

夫人は立ち上がると、ランプに火をともしました。その目は、赤く泣きはれているようでした。

まるいテーブルには、それはそれは小さいとうひが立てられていました。中央市場で、クリスマスツリーを売っているやもめのリーデルさんが、二人に贈ってくれたものでした。

「おたくのマルチンさんにね。」

と、リーデルさんはいいました。

これでターラー家にも、いっばしのクリスマスツリーができたわけでした。—でも、彼らの息子は家にはいませんでした。(p 256)

しかし、マルチンの変調に、彼の仲間よりもよく気がついてた人物が一人、いたのです。最後は、思わぬところで、あるいは必然的ともいえるところで、物語が展開します。

ドイツのクリスマスの一つの形をみた後に、今度は19世紀のイギリスのクリスマスの一つをみましましょう。次にご紹介するのは、ディケンズの『クリスマス・キャロル』です。

『飛ぶ教室』を、子どもでもつらく悲しいことはあるのだ、ということでもまとめるとすると、『クリスマス・キャロル』ではその逆で、大人でもいつもむっつり難しい顔ばかりしていないで、気さくに知人を訪問したり、隣人のためにできることをしたり、仲間と楽しんだりするべきだ、ということが一つ言えると思います。

この作品を演劇という形で見たことがあります。原作と違い、主人公のスクルージは「変化」したところをあまり表には出しませんでした。表には出さないけれども、内側からにじみでるような、どこが違うと言われてもはっきりは言えないが確かに「変化」を感じさせるような、そんな演出でした。その方

が人間らしくて、ずっと自然だったと思います。けれども、原作のスクルージのはじけるような「変化」の表わしようも私は好きです。

「どうしたらいいか、わからんわい！」スクルージは泣き笑いをしながら、そう叫びました。そして、大蛇に巻かれたラオコーンの彫像そっくりに、靴下を身体に巻きつけてみました。「羽みたいに軽くて、天使みたいに幸せで、小学生みたいに愉快的気分だ。酔っぱらったみたいに、頭がくらくらするぞ。みなさん、クリスマスおめでとう！そして、よいお年を、世界中のみなさん！ワーイ！ヤッホー！ワーイ！」（p 192）

「心暖まる」という形容がぴったりなこの2冊、ぜひ読んでみてください。

今回ご紹介した本。（筆者の手元にある版。）

『飛ぶ教室』 エーリッヒ・ケストナー／作 山口四郎／訳 滝平加根・／絵

講談社青い鳥文庫

『クリスマス・キャロル』 ディケンズ作 脇 明子訳 岩波少年文庫





アッラーに感謝することは本当に大切なことだと最近改めて感じることができました。私のような罪人がこの世に存在していただけること自体が奇跡です。アッラーの御慈悲に感謝します。最近いろいろな出来事が重なったこともあって、自分のアッラーへの感謝の少なさに思い知らされました。はじめはラマダーンの終わりの祭りの時、東京モスクで親しいシスターに「元気？」ときかれて「まあまあです。」と答えたら「アッラーに感謝しなさい。」といわれたことからはじまりました。そんなこといわれるとは想像もしていなかったので本当にびっくりしました。

シスター曰く、自分の死ぬ夢を見たのだそうです。とても怖い夢だったらしく、子供を抱きしめようにも自分の脇をすり抜けていって自分には気付いてくれなかった。ひとりぼっちだった。とおっしゃっていました。というわけで彼女は私に「アッラーに感謝しなさい。」とおっしゃったのでした。

かなり反省したのですが、忘れっぽい性格もあり、その後もなにかあるごとに愚痴ったり、ひとこと多かったりの連続でした。またある日は、直接感謝することとは関係ないかもしれませんが、自分を暗くしてしまう出来事がありました。私の口からでた災いで他人を傷つけてしまい、いつものことですが他人に対する思いやりの無さになりに自己嫌悪に陥りました。その方にはしょっちゅうというか毎日会っているので、これからどういう態度で接したらいいのか何日かかなり悩みました。この他にも、恥ずかしながら自分が他人に対して悪く思ったことがあったのですが、それが自分の息子に返ってきてこわくなり反省させられた出来事がありました。

そんな時、友人が「マイナスもプラスに生きる」（あなたの健康社）という本を貸してくれました。またダブルパンチで私の感謝の足りなさを指摘されたようでした。この本の著者はクリスチャンで、結核を患われて生死をさまよった方ですが、そういった困難にも負けず、神から与えられた自然の食には神の力があるといって食べ、病院の薬で治らなかった病気を克服された方です。その過程で自我をすて、神へ感謝、信頼することなどを身をもって学んでおられます。そして急に夫に出て行かれ、借金をかかえたりとマイナスからはじまった人生を神への感謝とともにプラスへと転じられたのでした。

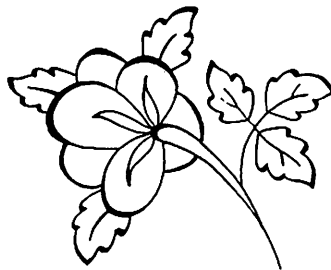
イスラームを知らない著者が、真のムスリムのような生き方をされていて、同じ日本にこんな人がいるのかと感動させられました。特に思ったことは、上に挙げたような最近自分の身の回りでおこったような出来事も、運命を信じる人にとってそれはアッラーから与えられた事であり、それが起こったことは何か良いご計画があるからであって、感謝しなければならぬということです。私のように嫌なことがあるとそれに対し愚痴を言ったり、自分の性格が嫌で自己嫌悪になることはアッラーに対しての冒瀆にあたい

し、他人を悪く思ったら自分に返ってきたという出来事にしても、アッラーを恐れるということもむしろアッラーは私を良い方向に導くため策をほどこしてくださったと感謝すべきでした。

すべてはアッラーからの贈り物である。そう思うと身の回りに起こった良いことも悪いこともすべてが嬉しく思え、アッラーに感謝の気持ちでいっぱいになります。

感謝の気持ちであふれると自分が小さく感じるのかその恩恵をくださるアッラーの偉大さにあるしみ恐れをいただきます。自分はこんなに悪いことをしているのに、いままでしてきたことを生きている間にどう償えるのか。話がそれていきそうなのでこれぐらいにしますが、とにかくこれからもアッラーに感謝する気持ちを少しでも持ち続けられたらいいなと思いました。

書籍：「マイナスもプラスに生きる」東城百合子，あなたの健康社



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200 円（日本以外は 1部 250 円）

国内： 1ヶ月 250 円、 6ヶ月 1300 円、 1年 2500 円

国外： 1ヶ月 300 円、 6ヶ月 1600 円、 1年 3000 円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義： Yasuragi
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部